

記念講演

朝井リョウさんによる記念講演

「朝井リョウの図書館ラジオ

～質問にひたすら答えます～」

今年の記念講演は、たくさんのお話を世に出している作家の朝井リョウさんにお越しいただきました。あまり「講演会」が好きではない朝井さんですが、ラジオ形式であれば、いろいろな人に楽しんでもらえるということで、「図書館ラジオ」と銘打ち、事前に多数寄せられた質問にたくさん答えていただきました。手話通訳の方をいじりつつ、図書館ラジオ、スタートです！



Q. 小・中・高・大・社会人というライフステージの中での、朝井さんと図書館とのかかわりを教えてください。

A. 子どもの頃は、両親に図書館に連れて行ってもらっていました。帰る時間まで図書館に放たれていたため、自由に本を手に取り、自然に本を好きになっていきました。中学校の司書の方から「中学生男子はあまり本を読みません」という投稿をいただきましたが、強制して読ませるのはよくないと思います。決まって書かされる読書感想文による「正しく読みとらなければ」圧からくる苦手意識もよくわかりますし。本がある環境を用意して、自然に好きになれば、それでいいんです。私が本を好きになってよかったと思うことは、現段階で人間は言葉でしかコミュニケーションが取れない以上、

その選択肢が増えた実感があること。私たちは現在、現象や感情を言葉でしか伝え合うことができません。それはつまり、本来線引きできないものにも言葉を当てはめるしかないということです。たとえば二十歳から飲酒 OKなのは、“アルコールを摂取しても大丈夫な人間”の状態を二十歳という言葉で無理やり表現しているわけですね。言葉でしか現象や感情を表現できない以上、本から多くの言葉を得られて幸運だったと思います。ただ本以外から言葉を受け取る人も多くいますよね。だから、ゲーム、漫画、音楽、映画、何かからでも言葉を受け取れるならばそれでいいんですよ。本を絶対に好きにならなければいけない理由はどこにもない。

「子どもの頃どんな本を読んでいましたか？」という質問もいただきました。青い鳥文庫シリーズが大好きで、特に「名探偵 夢水清志郎」の第4巻「魔女の隠れ里」は衝撃でした。「人間は多面である」と気づいたのはこの本のおかげ。今の執筆にも生きています。

図書館の話に戻ります。中学生の時は、最寄り駅と学校の間には図書館があり、迎えを待つ間自習でよく使っていました。そのころから、児童書より一般文芸を好むようになり、当時はやはり共感と救いを求めて本を開いていました。「こんなことを考えるのは自分だけじゃない」「あなたは1人じゃない」といつてもらうために本を取っていました。

スポーツ小説を読み漁る一方、いわゆる純文学もこのころから読み始めました。理解できないなりに、表現の妙を楽しんでいました。一般的に図書館では、大人しか行かないような場所に文芸書を置いていますが、案外興味を持つ少年少女もいると思うので、もっと目のつくところに文芸書を置いてもいいかもしれません。

あと、ドラマをきっかけに読んだ野沢尚さんの『反乱のボヤージュ』。エンターテインメントとは何ぞや？というものが全て詰まっている作品です。絶版になってほしくないので宣伝！

Q. 小説を書く時のアイデアはどのように生まれるのでしょうか。

A. 小説が生まれるのは、自分が暮らしている時間で違和感・怒りにぶつかる時ですね。私の場合、2つの違和感が本質的な部分でつながったとき小説が生まれます。『何者』を例に挙げると、就活生が SNS で使っている言葉の少なさ・文章の短さと 30 分～1・2 時間という短い時間の面接で企業が人間を判断するということ。「短い言葉で自分を表現しなければいけないこと」への違和感が重なったときに、この小説はほぼ完成しました。

「学生時代にやっておいた方がいいことは何ですか?」。それは「本気で何かに挑戦すること」だと思います。どんな小さいことでも本気でやっていたら、違和感・怒りにぶつかりますし、大体本気で挑むと滑稽な瞬間が発生するんですよ。それが一生の思い出になる。本気から来る滑稽さ、最高。そんな出来事 1 つずつを点として、いつしか星座のように思わぬ形に繋がっていることが、小説を書くことであり生きることなのかなと思います。

Q. 高校生のときに読んでおきたかったと思う本は何ですか。

A. 人生に効くおまじないをもらえる本、この本を読んでよかったと思えるたった 1 行に出会える、そんな本です。窪美澄さんの『よるのふくらみ』『じっと手を見る』からは、明るいだけが希望ではない、溶けだしてしまいそうな心をかたどってくれる何かを感じました。

自分が 10 代の時は、共感・救いばかりを求めて本を読んでいましたが、そればかりでなくて、自分にはない視点、例えば数学的なことや海外文学など、自分にはない物を差し出してくれるような本をすすめたかったですね。

(右の本リストを参照)

講演会が終わると、朝井さんは座っていたドーナツクッションを手に取り、颯爽と会場を後

にされました。ここでは紹介しきれないほど、たくさんの質問に答えていただき、本当にありがとうございました。

<朝井リョウさんの本棚>

子供のころに読んでいた本

青い鳥文庫シリーズ

・はやみねかおる「名探偵 夢水清志郎」シリーズ

第 4 巻「魔女の隠れ里」

・松原秀行「パスワード」シリーズ

・令丈ヒロ子さん「料理少年」シリーズ

中高生のころに読んでいた本

・村山由佳『BAD KIDS』シリーズ

・石田衣良『4TEEN』

・重松清『ナイフ』『きみの友だち』

・伊藤たかみ『ぎぶそん』

・あさのあつこ『バッテリー』

・三浦しをん『風が強く吹いている』

・川島誠『800』・早見和真『ひやくはち』

・森絵都『DIVE!!』・豊島ミホ『檸檬のころ』

・辻仁成『ピアノシモ』『海峡の光』

・吉田修一『ひなた』『パーク・ライフ』

・野沢尚『反乱のボヤージュ』

中高校生の自分におすすめしたい本

・窪美澄『よるのふくらみ』『じっと手を見る』

・森田真生『数学する身体』

・サイモン・シン『数学者たちの楽園』

・ダン・サヴェージ『キッド』『誓います』

・チョン・セラン『フィフティ・ピープル』

・チョ・ナムジュ『82年生まれ、キム・ジョン』

・奥田亜希子『リバーズ&リバーズ』



(記録：埼玉県立妻沼高等学校 長沼 祥子)